舟(ふね)になった木(き)のカムイ　――シリコロカムイが語(かた)った物語(ものがたり)

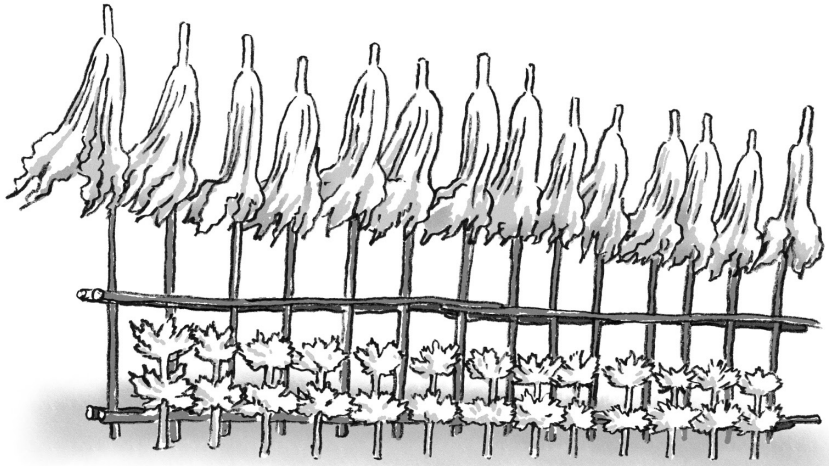
わたしは、森の大きな木。大地の生き物たちを見守るシリコロカムイ*です。
森のなかで、天空にのびた手を、ゆらゆらと、ゆりうごかし、
大地にのびた手を、ゆらゆらと、ゆりうごかし、
わたしは、ゆったりと暮らしていました。

ある日のこと、川下のほうから人間の声が聞こえてきました。
人間たちは、森をぬけ、草原をこえて、わたしのところへ、やってきました。
そのなかに、若いオキキリマ*がいたのです。

オキキリマは、いいました。
「さあ、みんな、イナウ*を作る木を切ろう。
シリコロカムイにお祈りするために！」
イナウは、わたしへの捧げもの、すばらしい贈りものです。
人間たちは、みんなで木を切り、イナウをけずりました。
そして、祭壇であるヌサ*に立てて、カムイのわたしに、捧げてくれました。

オキキリマは、二回祈って、三回祈って、
こういいました。
「わたしたちは、これから、山に猟にいきます。
シリコロカムイよ、
どうかわたしたちを見守ってください。
メスのクマの皮二十枚を六包み、
オスのクマの皮二十枚を六包み、
オスのシカの皮二十枚を六包み、
さずかるように、見守ってください。
春になり、山からおりてきたら、
あなたさまに、たっぷりお礼をさせていただきますから」
そしてまた、二回祈って、三回祈って、
両手をすりあわせて祈り、両手をなでおろして祈り、
みんなで、冬の山へと、でかけていきました。

そこで、わたしもがんばって、
オキキリマたちの猟がうまくいくように、
しっかり、見守ってあげたのです。



春になり、みんなが山からおりてきました。
そして、山のような獲物を、わたしのそばに、どさりと、おきました。
かれらの望んだ獲物は、すべて手にはいったのです。
オキキリマたちは、お礼のお祈りをはじめました。
ところが、どういうことでしょうか。
ヌサも立てないまま、捧げられたのは、
ほんの小さなイナウと、
まずい脂身と、筋ばかりのかたい肉。
そのうえ、こんなことまで、いうのです。
「これから山をおりますが、すぐにもどってきます。
そのときは、あなたを切りたおして、舟を作り、
海の向こうへ、交易にいくのです。
交易がうまくいったら、また、たっぷりお礼をしますからね」
二回祈って、三回祈って、
両手をすりあわせて祈り、両手をなでおろして祈り、
コタンへと、もどっていきました。
形だけは、祈りの作法にかなっていましたが、
じょうだんではありません。

わたしがムカムカしていると、二、三日して、
オキキリマたちが、まさかりをかついで、やってきました。
「さあさあ、シリコロカムイよ。
舟を作るために、切らせてもらいますよ」
オキキリマは、そういって、まさかりをふりおろしました。

わたしは、怒りにまかせ、かたい肉*を思いっきり表に出し、
やわらかい肉*を、ぐっと内側にしまったのです。

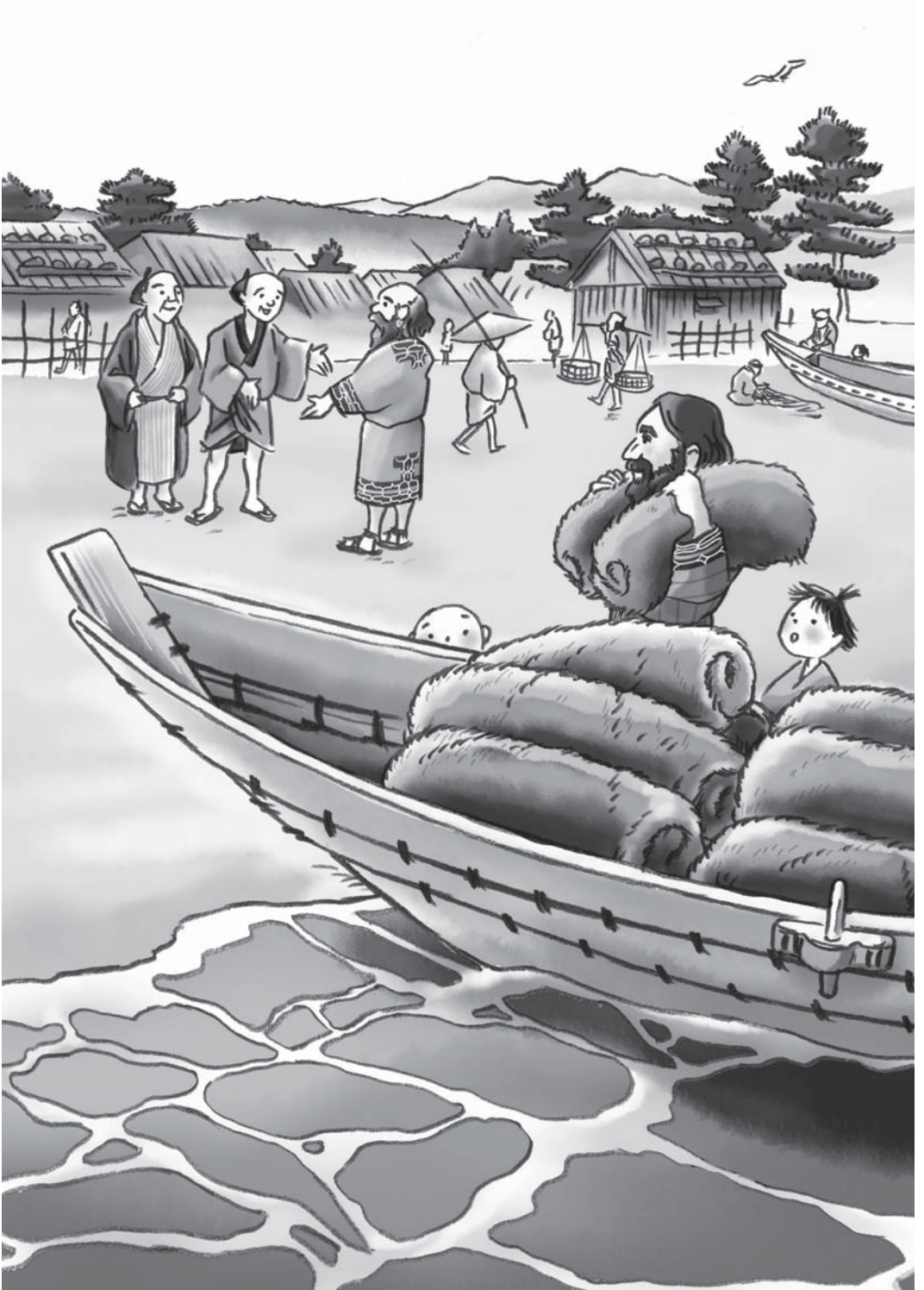
さすがのまさかりも、わたしのかたさにはかなわず、
刃が、ボロボロにこぼれてしまいました。
「おかしいな。おい、そっちのまさかりをよこせ」
ためしてみても、おなじこと。
「まったくおかしい。おい、そっちのもよこせ」
また、ためしてみても、また、おなじこと。
「シリコロカムイは、いじわるだなあ。
まさかりの刃が、すっかりこぼれてしまったじゃないか」
オキキリマたちは、わたしの悪口をいいながら、コタンへとかえっていきました。

さて、それからのわたしは、いつものように、
天空にのびた手を、ゆらゆらと、ゆりうごかし、
大地にのびた手を、ゆらゆらと、ゆりうごかし、ゆったりと暮らしていたのです。
すると、ある日、川下のほうから、人間の声が聞こえてきました。
人間たちは、森をぬけ、草原をこえて、わたしのところへやってきました。
そのなかに、若いサマイエクル*がいたのです。

「さあ、みんな、イナウを作る木を切ろう。シリコロカムイにお祈りするために！」
サマイエクルは、そういい、みんなといっしょに、木を切り、イナウをけずり、
ヌサに立てて、カムイであるわたしに捧げてくれました。
そして、二回祈って、三回祈って、こういいました。
「わたしたちは、これから、山に猟にいきます。
シリコロカムイよ、どうかわたしたちを見守ってください。
メスのクマの皮二十枚を六包み、オスのクマの皮二十枚を六包み、
オスのシカの皮二十枚を六包み、さずかるように、見守ってください。
春になり、山からおりてきたら、たっぷりお礼をさせていただきますから」
そしてまた、二回祈って、三回祈って、
両手をすりあわせて祈り、両手をなでおろして祈り、冬の山へと、でかけていきました。

そこで、わたしもがんばって、
サマイエクルたちの猟がうまくいくように、しっかり、見守ってあげたのです。

春になり、サマイエクルたちが山からおりてきました。
そして、山のような獲物を、わたしのそばに、ていねいに置きました。
かれらの望んだ獲物は、すべて手にはいったのです。
サマイエクルたちは、りっぱなヌサを立てて、お礼のお祈りをはじめました。
捧げられたのは、大きくてりっぱなイナウと、
とろりとおいしい脂身と、やわらかいよい肉でした。
「これから山をおりますが、またもどってきます。
そのときは、あなたを切りたおして、舟を作り、
海の向こうへ、交易にいきたいと思っています。
交易がうまくいったら、また、たっぷりお礼をしますからね」
二回祈って、三回祈って、
両手をすりあわせて祈り、両手をなでおろして祈り、
コタンへと、もどっていきました。



待ちどおしいような気持ちでいると、二、三日して、
サマイエクルたちが、まさかりをかついでやってきました。
その顔をみるのが、わたしには、うれしくてなりませんでした。
「さあさあ、シリコロカムイよ。
舟を作るために、切らせてもらいますよ」
サマイエクルは、そういって、まさかりを振りおろしました。
わたしは、やわらかい肉を思いっきり表に出し、
かたい肉をぐっと内側にしまいました。
サマイエクルたちは、やすやすと、わたしを切りたおし、
わたしをくりぬき、板をつけて、すばらしい舟に仕立ててくれたのです。
そして、山のようなクマの毛皮、シカの毛皮を舟につみこむと、海へとこぎだしたのです。

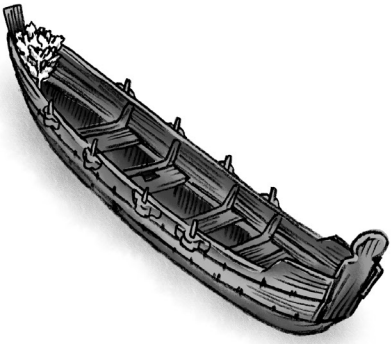
サマイエクルたちがめざしたのは、和人たちの住むマトマイ*のコタン。
よい航海ができるようにと、舟になったわたしも、見守りました。
そのため、海も日ざしもおだやかで、すばらしい日がつづき、
舟はぶじ、マトマイのコタンにつきました。
コタンでは、クマの皮やシカの皮を、米や布やうるしの器などと、とりかえたので、
舟のなかは、おいしいものや、すてきなものでぎっしりです。

帰り道も、これがまた、じつによいお天気で、
わたしたちは、とくい顔で、もどってきたのでした。
サマイエクルたちは、さっそく、すばらしくりっぱなイナウと、
いい香りのするお酒を作って、わたしに捧げてくれました。
わたしも、よかったよかったと、みんなとともによろこびました。

そのつぎの年も、そのまたつぎの年も、
サマイエクルたちは、獲物を舟にのせて交易の旅に出ました。
交易は、いつもとてもうまくいき、だれもが満足し、
もどってくるたびに、じつにていねいに、お礼の捧げものをしてくれたのです。

そうやって、二年、三年と、すぎていきました。
わたしもすっかり年老いてしまいました。

とうとう引退する日がやってきたのです。
サマイエクルたちは、わたしのかわりになる、あたらしい舟を作りました。
そして、わたしは陸に引きあげられました。

わたしはいま、コタンでたくさんのイナウに囲まれ、
あたらしい舟とともに、祈りを捧げられています。
わたしは、ほんとうに、しあわせな舟です。
わたしを大切にしてくれたサマイエクルたちを、
わたしは、いつまでもいつまでも、
見守っていったのです。

と、シリコロカムイが語りました。